

国語 2026 年度 出題の意図

第1問は稲田豊史『映画を早送りで観る人たち』第二章「セリフで全部説明してほしい人たち」の一部、第2問は松村圭一郎『うしろめたさの人類学』の一部を問題文として用いた。いずれも現代社会のコミュニケーションのあり方を論じた評論であり、論理の展開を正確にたどる力と、語彙や指示語・接続表現を手がかりに筆者の主張を捉える力を問うこととした。あわせて、本文に即した内容説明や抜き出しの設問、漢字の読み書きを配し、読解力を総合的に問う構成としている。

稲田豊史の評論では、セリフで状況や心情を逐一説明する作品が増えた背景と、「わかりやすさ」を礼賛する現代社会の傾向が論じられている。漢字の読み書き、空欄補充による文脈把握、傍線部の理由や内容説明に加え、二十五字の抜き出し問題を配することで、語彙力・文脈把握力・要旨把握力をバランスよく問えるよう構成した。暗喩や皮肉が通じにくくなった現状を読み取り、筆者が「わかりやすさ」をどのような構造のもとに位置づけているかを的確に捉えられるかを見る。

第2問は、人と人との「関係」は先にあるのではなく、日々の「行為」の蓄積によって形作られるという、文化人類学の立場からの考察を題材とした。接続詞の組み合わせを問う空欄補充、文章の見出しを選ぶ問い、ゴッフマンの「状況の定義の投企」をめぐる傍線部の内容説明、結論部分の主旨理解までを段階的に配し、抽象度の高い論旨を順を追って把握できるかを問う。最終問では本文外に置かれた具体例の文章とあわせて、筆者の主張の射程を読み取る力を見る。

いずれの問題文も、現代社会のコミュニケーションや受容のあり方を問い直す内容であり、受験生にとってあまりなじみのない論題かもしれない。しかし、大学での学修においては、抽象度の高い文章を論理的に読み解き、筆者の主張を自分の言葉で整理する読解力が要となる。出題にあたっては、本文に即して根拠を押さえる姿勢を一貫して問えるよう、内容説明・空欄補充・抜き出しを組み合わせた構成とした。

※各問いの詳細は、一般選抜A一日目の内容に基づいて記載しております。